

# 学校自己点検・自己評価

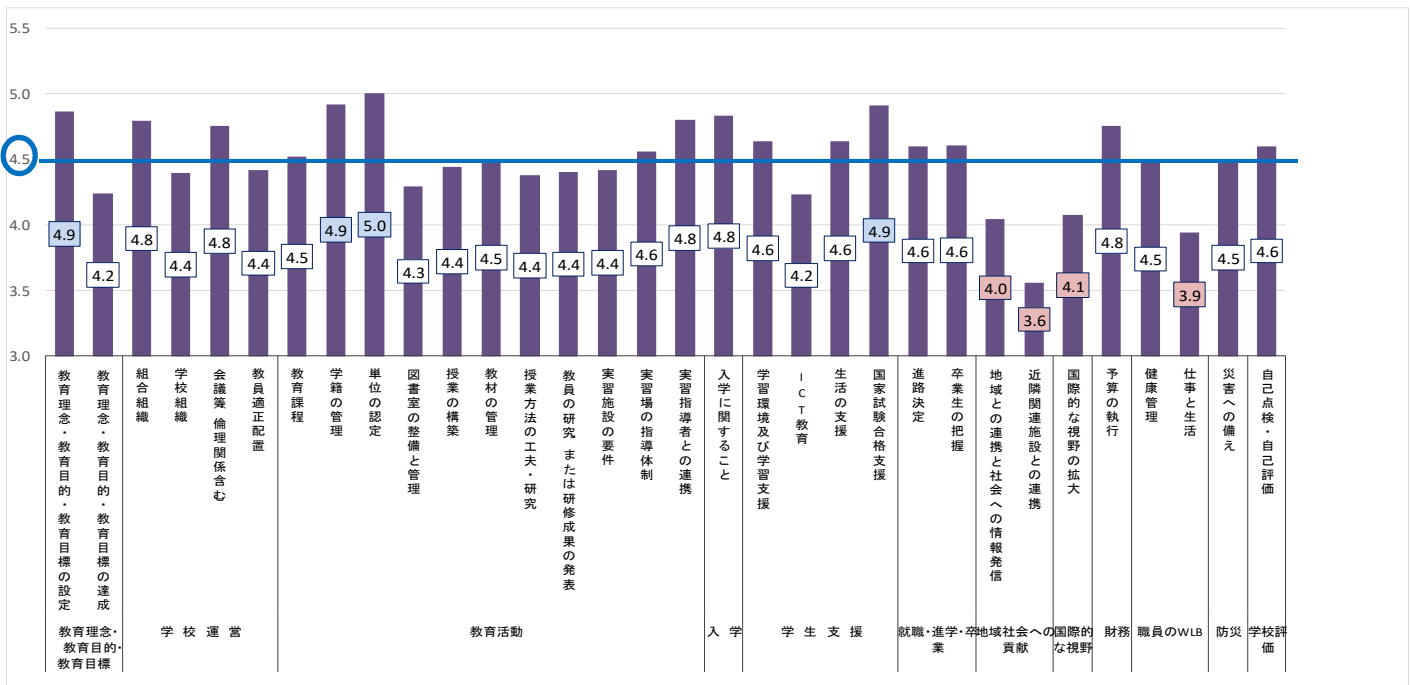
## 1 目的

教育活動その他の学校運営の状況について評価を行い、その結果に基づき学校運営の改善を図るとともに、社会のニーズを踏まえ質の高い看護教育を保证する。

## 2 方法

全教職員が学校自己点検・自己評価の中項目に則って評価し、学校自己点検・自己評価委員会で集計および分析した。評価基準は、5：できている、4：ややできている（もう少し）、3：どちらでもない、2：ややできていない（不十分）、1：できていないの5段階とした。評価基準を得点化して中項目の平均値、及び大項目の視点から評価した。また、新型コロナウイルス感染防止対策について実施した施策は各項目に含めて評価した。

## 3 結果・評価

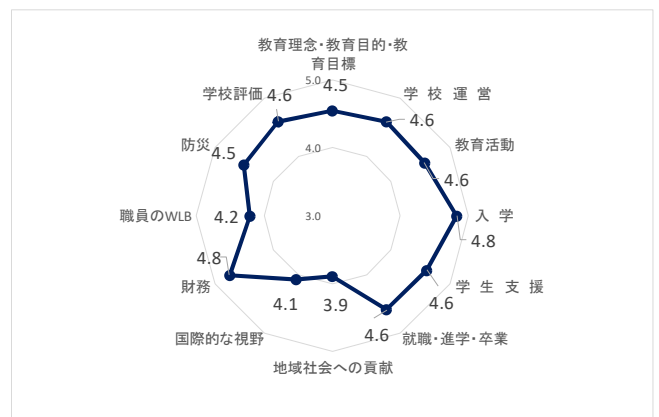


【図1 評価中項目の平均点】

中項目全32項目の平均点は5点中4.5点(90.0%)であり、概ねできていた。平均点以上は19項目、平均点未満は13項目あった。特に得点が高い項目は、「教育理念・教育目的・教育目標の設定」、「学籍の管理」、「単位の認定」、「国家試験合格支援」の4項目であった。逆に得点が高い項目は「地域との連携と社会への情報発信」、「近隣関連施設との連携」、「国際的な視野の拡大」、「仕事と生活」の4項目であった。以下大項目に沿って評価する。

### 1) 教育理念・教育目的・教育目標

教育理念・目的・目標は学生便覧で示し、学生に年1回以上確認した。これを学生に浸透させるためには、繰り返し確認する必要があるが、実施及び評価があいまいである。新カリキュラムに向け、ディ



【図2 評価大項目の平均点】

プロマポリシー、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシーを策定した。客観的・組織的な評価体制が整っていないため、その体制を整える必要がある。

## 2) 学校運営

中東遠看護専門学校組合は、適正に運用した。学校運営方針を挙げ、教務課及び総務課が連携して業務を遂行しコロナ禍ではあったが、学内のICT化の整備やインフォクリッパーの導入が業務の効率化をはかり成果を得た。学校組織の運用時に情報の共有や伝達に困難をきたす場合があった。教員のキャリアアンカーについての確認、助言が適宜され専門領域に配置したが、母性看護学担当教員の不足があった。

## 3) 教育活動

新カリキュラム編成にあたり、現行のカリキュラムの検討・確認の機会となったが、カリキュラム評価が組織的に実施されていないため、課題の抽出に客観性があるとはいいがたい現状であった。ICT活用により事務作業が効率化され教育活動の充実につながった。図書室は、コロナ感染防止のため開室時間が短縮され放課後に利用しにくい状況であった。研究活動は、コロナ対応や新カリキュラム構築などの業務により、日常的な教材研究の時間確保が困難であったが、情報共有や相談・検討しながら授業方法の工夫を行った。教員個々の実践結果や課題は、「実践評価カリヨン」に掲載し共有化をはかった。

実習施設の要件は概ね満たされており、実習場の指導体制も整っていた。コロナ禍ではあったが、Teamsを用いて臨地実習指導者会や研修会を開催し、臨地実習指導者と教員の連携をはかった。

## 4) 入学

入試委員会の審議により、適正に入学者を決定した。近年の志願者の減少から推薦・社会人入試と一般入試による入学者の割合を見直し、定員60人を確保した。入学試験は学力試験と面接試験であり、面接の評価視点を本校アドミッションポリシーに則って実施した。個別面接による判定の限界は否めない。入学予定者を対象に、入学前学習を実施した。応援メッセージの配信及び学習進捗状況確認アンケートにより入学予定者の学習状況の把握と疑問の解決に役立った。

## 5) 学生支援

学習環境は、感染防止策に努め、安心安全な環境を整えた。地域の感染拡大時には、密を避けリモート授業への変更など、感染防止に努めた結果、クラスターの発生はなかった。ICTは、初期に導入したシステムを見直し、より活用しやすいシステムに変更した。セキュリティーポリシーを策定し、次年度から運用する。運用にあたっては情報倫理の規程がない。

生活支援は、各種奨学金、専門実践教育訓練給付金、緊急支援給付金の申請を紹介し、延べ208人が支援を受けた。学生保険Willは10件活用された。また、カウンセリングは26件の利用があった。必要時には学生の家族と連携・連絡をとり、学生の課題解決に努めた。

健康管理は、毎日の検温や自覚症状の報告などを徹底した。また、新型コロナワクチンやインフルエンザワクチンの接種及び、麻疹、風疹、水痘、耳下腺炎、B型肝炎の抗体獲得に向けた指導を行い、感染者は若干いたものの、感染拡大はなかった。

国家試験合格支援は、担当教員を中心に1年生から3年生までの学習支援を行った。模擬試験後の振り返り方法や学生が主体的に取り組めるよう工夫した結果、看護師国家試験は全員合格した。

## 6) 就業・進学・卒業

1年次から一生涯を意識し、継続的にビジョンを明確化したり、学生の希望や適性を踏まえた支援を行った。2年次の就職ガイダンス開催時期を変更し、主体的なインターンシップ参加施設の決定に役立った。就職活動に関する3学年の交流会を実施し、3年生から下級生へ情報の伝達や下級生のイメージ化ができた。

管内病院への聞き取りにて卒業生把握を行った。また、卒後3年目までの卒業生に対し、ホームカミ

ングデイを実施した。卒後1年目はコロナ禍第6波にあたり中止となったが、学校は情報把握の場となり、卒業生はリフレッシュの場となった。

#### 7) 地域社会への貢献

コロナ禍によって、学校行事における地域の参加が困難となり、地域への広報の活発化には至らなかった。しかし、宣誓式やオープンキャンパス、カリヨン祭などをホームページに掲載し、学校の様子を紹介できた。また、地域で例年計画されている行事やイベントが縮小されたため、ボランティアの機会はほとんどなかった。一方、新型コロナウイルスワクチン接種のボランティアや、新型コロナウイルス感染自宅療養者の健康観察ボランティアに参加できた。

#### 8) 国際的な視野

海外で活躍した卒業生を招いたり、JICA海外協力隊経験者の講話を聞く機会があり、国際的な視野の拡大や卒後海外で活躍するといったビジョンを描くのに役立った。また、医療現場で英語でコミュニケーションがとれるようTOPEC看護英語試験を受験した。

#### 9) 財務

令和3年度予算の執行状況、令和4年度予算計画を幹事会、運営委員会、議会に報告した。予算を家計に例えたり、年度別電気使用量を示し節電を呼び掛け歳出削減に努めた。教務課と総務課が協力し、経営意識を持って業務を行った。

#### 10) 教職員のWLB

教職員各自が自己の健康管理に取り組み、コロナ禍にあっても新型コロナウイルスの感染者はいなかった。有給休暇の取得平均は目標値に達した。教務課は、通常業務に加え、新カリキュラムの構築や新型コロナウイルス感染症の対応により、業務が煩雑且つ複雑化していた。教職員の研修によって、業務整理への意識は高まったが、業務に反映するには課題が残った。

#### 11) 防災

防災訓練及び抜き打ち避難訓練、災害時伝言ダイヤルの聞き取り等の訓練を実施し、学生の防災意識の継続に努めた。また、教職員の防災訓練時に防災備品の確認の他、電源確保、学生連絡訓練等を実施した。また、課を越えてグループワークし、今後の課題を見出した。今年度から、学生各自が1泊に必要な水、食糧を購入し学内に保管している。また、実習時の災害に備え、学生各自1泊分の水、食糧を持参するよう指導している。

防災マニュアルは、健康安全管理によって見直しを行った。

#### 12) 学校の評価

学校評価を定期的に行い次年度の課題として取り組んだ。総務課教務課で取り組みの意見交換を行い、課を越えた業務の確認を行った。

### 4 課題

自己点検・自己評価の結果、抽出された課題は以下の7項目である。

- 1) カリキュラム全体を客観的に評価するためのカリキュラム評価委員会の設置
- 2) 学校運営の運用を明確化するための学校組織図の作成
- 3) 母性看護学の担当教員を軸にした教員確保対策
- 4) 入学試験の方法と内容の検討
- 5) セキュリティポリシー運用のための情報倫理規定の整備
- 6) 利用しやすい図書室の運用にむけた工夫や改善
- 7) 課題解決のための評価改善委員会の設置